



郷土のかぜ

仙台市民図書館 郷土資料コーナーから

今はなき木町末無^{すえなし}という町に住んでいた宮城の偉人

仙台市民図書館郷土資料担当 渡邊 啓市

東京にある和菓子や洋菓子などの製造・販売で有名な「新宿中村屋」を起こした実業家、相馬黒光^{こっこう}について調べているという方から、黒光が生まれ育った場所についての問い合わせがありました。

黒光について調べてみると、仙台文学館発行の展示会図録『アンビシャスガール相馬黒光展』には、略年譜が載っており、そこに、1875（明治8）年、仙台的定禅寺櫓丁通本材木町西裏末無^{すえなし}に誕生。「良^{りょう}」と名づけられたことや、片平丁小学校や宮城女学校に入学したことなどが記されていました。また、幕末の仙台城下の古地図のページには黒光の祖父である星雄記の名前と、屋敷があったあたりの現在の写真があり、「このあたりは、かつて「木町末無」と呼ばれていた。現在は「立町」の一部になっている」と書かれていました。この時のレファレンスは、その資料をお見せして終了したのですが、後日、その付近を歩いてみると、町内会の掲示板に末無（木町末無町内会）という名前が書かれているのを見つけました。

ところで、末無という町名で思い出したのが、近代に活躍した宮城県大河原町出身の詩人、尾形亀之助です。亀之助は、1909（明治42）年、9歳の頃に大河原町から仙台市木町末無に引っ越してきます。この後、亀之助は喘息療養のため、1911（明治44）年に一旦仙台を離れ、鎌倉に転地。1917（大正6）年、鎌倉から仙台に戻ったものの、1920（大正9）年に上京。1932（昭和7）年、再び仙台に帰郷した後は晩年まで過ごすことになるのですが、大正元年の地図が載っている『仙台地図さんぽ 100年前の仙台を歩く』には、尾形家別邸と書かれた広い敷地（今の西公園の一部も含む）が、木町末無^{すえなし}の地にしっかりと記されていました。

残念ながら住んでいた時期が違うため、2人が直接会うことはなかったのですが、かつて、この2人が同じ地域内で暮らしていたかと思うと大変感慨深いものがありました。

ただ、その付近には相馬黒光や尾形亀之助の居住地であったとする表示は見つけれませんでした。たまに地域猫が通るだけの人通りの少ない平凡な住宅地なのですが、それはそれで、時がゆっくり流れていく感じがして、当時の時代の空気が伝わってくるようでした。皆さんも、明治・大正時代の雰囲気を想像しながら、散策してみてもはいかがでしょうか。



<参考図書>

『アンビシャス・ガール相馬黒光展』 仙台文学館／編集 S289㍿

『尾形亀之助展』 仙台文学館／編集 S911.5㍿

『仙台地図さんぽ 100年前の仙台を歩く』 S291㍿

■ある日のレファレンスから

ある方から、仙台・宮城のラーメン文化についてのレファレンスを受けました。

宮城の麺といえば、「冷やし中華」、「白石温麺」、「石巻焼きそば」、仙台のラーメンであれば「辛味噌」を思い浮かべる方も多いと思いますが、まずは、新聞記事で調べてみることにしました。

すると、河北新報 2007 年 11 月 28 日付夕刊「数字で見る仙台人の暮らし⑫中華そば消費量 2 位」という記事の中に、「大正時代、長崎から仙台に来た中国人が屋台ラーメンの頭領を務めていた。仙台の屋台が福島や新潟、京都などに散らばり、各地で店を構えた」、「戦後の食糧難の時は、手近な材料で作れる中華そばが闇市で人気となった。仙台はまた、留学や求職で訪れる中国人も多かった。仙台在住の中国人が始めた中華料理店の中にも、今に続く店がある」などの記載があり、仙台のラーメンの歴史は意外と古いことが分かりました。

ちなみに、初めてラーメンという名前を使って営業したお店は、宮城県出身の大久昌治氏が札幌で創業した「竹家食堂」だそうです。（『さっぱりラーメンの本』北海道新聞社／編：国立国会図書館デジタルコレクション）

■新着図書紹介（郷土・参考資料コーナーに新しく入った図書）

『方言漢字事典』

笹原 宏之／編著 研究社 R811 サ

話し言葉に方言があるように、漢字にも特定の地域でしか用いられない「方言漢字」と呼ばれる地域漢字があります。

宮城で使われている地域漢字も紹介されており、その中のひとつに「閑」という漢字があります。宮城県で使われる「閑」というと、多くの方が思いつくのは名取市閑上だと思いますが、ほかにも、石巻市の桃生町太田閑前もあります。現在の宮城では地名としてなじみ深い「閑」の字ですが、かつては仙台市と名取市を中心に、子どもの名付けにもよく使われていた漢字だったそうです。

本書は調べるためのツールとして使えるのはもちろんのこと、パラパラとめくって気になった地域漢字の意味や歴史を読んで楽しむこともできます。ぜひお手に取ってご覧ください。



『「たび活×住み活」in 宮城』

大沢 玲子／著 ファーストステップ出版 S291 オ

タイトルの「たび活×住み活」とは、観光と移住の両方の視点で地方の魅力を深掘りし、応援していこうという趣旨でつけたもの。著者独自の新しい地方の楽しみ方を提唱し、「街」と「自然」が共存する宮城の多様な魅力などに迫ります。

一般的な観光ガイドでよく取り上げられている「笹かま」や「牛タン」といった仙台ならではのお土産の紹介は少なめですが、宮城県の地域ごとの特徴や、旧女川交番、門脇小学校等の震災遺構の紹介や、山元町のイチゴ産業の復興などについても詳しく解説されています。

仙台のイメージが強い宮城ですが、各地域にも知られざる魅力があることがよくわかる一冊となっています。



■編集後記■ 2025年 2 月 22 日（土）13:30～15:00、仙台市博物館×仙台市民図書館連携講座「交友がつむいだ仙台の文芸」（手話通訳つき）をせんだいメディアテーク 1 階オープンスクエアで行います（定員 150 名・抽選）。下記宛に往復はがき、または Eメール（1 通につき 2 名まで）で①講座名（Eメール送信時の件名は「博物館・図書館連携講座申込み」としてください）、②郵便番号・住所、③氏名（フリガナ）、④電話番号、⑤返信先（往復はがき表面）、⑥手話通訳が必要な場合はその旨を記入して、2 月 6 日（木）（必着）までお申込みください。

発行：仙台市民図書館 郷土・参考資料コーナー
所在地：仙台市青葉区春日町2-1 せんだいメディアテーク内 TEL:022-261-1585
Eメール：tosyokan@smt.city.sendai.jp